



プロジェクトのマスコットキャラクターのアマルちゃん。「アマル」はアラビア語で「希望」の意味。女子教育普及のシンボルとして、イエメン国内に広まっている



娘の通学に消極的だった父親たちの中に、学校を信頼して影から子を「見守る」という意識を高めたのも大きな一歩だ

また、親だけでなく、地域全体に女子教育の必要性を伝えるべく、女子教育をテーマにした歌やラジオドラマを



[右]基本的に授業は男女別のことが多いが、学校委員会の提案により、全校朝礼は全校生徒で行われるようになった  
[左]「学校改善計画」について議論する学校委員会のメンバー。郡教育局と州政府の承認後、次年度に予算が配分される



年に国家計画として「基礎教育開発戦略」を策定。質の良い基礎教育を学校現場で実現するために、地域レベルから女子教育の普及に着手。JICAもこれを後押しすべく、05年6月から3年にわたり「タイズ州地域女子教育向上計画」を通じて、南西部タイズ州6郡で特に女子の就学率の低いへき地の59校をパイロット校に選び、行政・学校・地域の人々を巻き込んだ取り組みを実施した。

### 学校と地域を近付ける 仕組みづくり

親たちがなぜ娘を学校に行かせないのか。まずプロジェクトで

は、その「本当の」理由をヒアリングした。すると意外なことに、彼らは娘が学校に行くことに反対しているわけではなかった。ただ、特に母親に関しては、かつて自分が行ったことのない、またはドロップアウトした「学校」という場所に子どもを通わせることに大きな不安があったのだ。そう、まず必要だったのは、学校と地域の心理的距離を近付けること。そこでJICAは、行政・学校・地域の人々が協働で学校運営にかかわれるよう、各学校に学校委員会を組織化。「父会」「母会」と学校が協働で、学校の設備や行事、カリキュラムなどについての改善案(学

校改善計画)をまとめて行政側に提案・実施するという仕組みづくりを支援した。

とはいえ、最初のころは「母会」の出席者がほとんどいかなかった。しかし女子教育普及のためには、彼女たちの協力は必要不可欠。そこでまずは母親たちに学校に足を運んでもらおうと、母親向けに裁縫教室を開くことを学校側が提案。「家事労働しかしてこなかった母親たちに学びのチャンスを与えると同時に、学校への親近感もはぐくむことができる。『学校』と『学び』への理解が深まるので一石二鳥でした」と田中伸一郎JICA専門家(株式会社パデコ)は話す。市場で自分が作った洋服を売ることも、読書や計算の能力が必要になる。そのニーズに応じてさらに識字教室を行うと、「母会」への参加者もどんどん増えてきた。「自分の娘にも学校で学ばせたい」。いっしょか、そんな声が自然にあちこちで聞かれるようになったのだ。

プロジェクトで作成して流したり、宗教指導者にマスクでメッセージを伝えてもらったり……。さまざまな工夫を凝らした結果、パイロット校の女子の就学者数は3年間で1.5倍に、男子の就学者数も1.3倍にまで増加。プロジェクト開始前は「男女が平等に教育の権利を持つべき」と考える校長は1割に満たなかったが、今ではほぼ全員が、女子の就学の重要性を積極的に訴えるまでになった。

このタイズ州で確立した学校委員会を中心とした学校運営モデルの全国展開を目指し、JICAは09年12月から「女子教育向上計画フェーズ2」を開始。ダマール州をパイロットサイトにモデルの改善・普及を進めながら、中央政府では他の援助機関とともに「学校委員会」の運営についての共通ガイドラインの作成に取り組んでいる。

現在、治安悪化のため、プロジェクトは中断しているが、数年前と比べると、タイズ州を中心に各地の学校では、女の子が笑顔で通学している姿があちこちで見られるようになった。読書書きができるようになり、彼女たちの夢は大きく広がる。

学校は将来への希望を生み出す扉。すべての人が教育を受けられるよう、JICAはこれからもイエメンの取り組みを支援していく。



裁縫教室に参加する母親たち。「人生で初めて学校に足を踏み入れました。読み書きができることで、こんなに世界が開けるとは思わなかった。娘にもこの喜びを感じてほしい」



イエメン  
from YEMEN

## 地域の力で 女子に教育への扉を開く

宗教上の理由などから、女子が教育にアクセスする機会が限られているイエメン。JICAは国全体の女子教育の底上げを目指し、地域主導の学校運営の仕組みづくりを支援している。

「この問題分かる人いますか?」「はい!」「はい!」  
「では、前に出て書いてみてください!」  
長机が並べられた小学校の教室で、楽しそうに授業を受ける子どもたち。日本の学校でもよく見られる光景だが、女の子たちが身に着けているのは、制服ではなく「アバヤ」と呼ばれる大きな黒い布。そう、イスラム教徒によく見られる女性の服装だ。

ここは、中東の国イエメン。イスラム教の中でも敬けんな信者の

多い国の一つだ。古くから「女性は守られるべきもの」という考えが強く、肌を露出してはいけない、一人で外を歩くことは危険、社会には出ずに家事労働などを優先すべきといった伝統的な通念が、特に地方部ではいまだ色濃く残っている。

こうした背景に経済的・物理的事情が重なり、長年この国で問題視されてきたのが女子の就学率の低さだ。近くに学校がない、教室の数が足りない、防犯上の壁や女子トイレがない、女性の先生がいえない学習環境の中で、女子の初等教育の純就学率は65%。男子

の85%に対して、格段に低い数値に止まっている。女子の識字率も40%に満たないのが現実だ。

しかし1990年の「万人のための教育世界会議」で提唱された「万人のための教育(EFA)」にあるように、すべての子どもに教育を受ける権利はある。これを受けてイエメン政府は、2002



真剣なまなざしで授業を受ける女の子たち。教育を受け、読み書きができるようになることで、彼女たちの未来は大きく広がる